

平成 23 年度 第 2 回海域の物質循環健全化計画統括検討委員会における主な指摘と対応

委員名	指摘内容	対応内容
ヘルシープラン策定要領(案)について		
鈴木委員、松田座長、山本委員	<p>(環境基準)</p> <ul style="list-style-type: none"> ヘルシープランと環境基準の関係(位置づけ)を示してほしい。 環境基準を満たせばよいというわけではない。 窒素、磷など生物を介して循環する物質はそれだけをコントロールすることはできないということの認識が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> 環境基準の達成等の各種取り組みと海域のヘルシープランがあいまって、将来の海を豊かに、より健全にしていくことが望まれることを記載した。 <p>(資料－1 ～はじめに～)</p>
鈴木委員、寺島委員	<p>(合意形成)</p> <ul style="list-style-type: none"> 沿岸域の統合管理では、合意形成は一つの目標である。ヘルシープランが合意の一つの目安であるべき。 お互いに持続的可能な開発に向けて「合意形成をはかるように取り組む」という姿勢を示していくことが重要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 合意形成の必要性と目標について修文した。(資料－1 P5～6)
寺島委員	<ul style="list-style-type: none"> 自然的な問題だけでなく、社会的な問題も入ってはじめて、実際に地域で使えるものになる。 	<ul style="list-style-type: none"> 調査方法等に社会的な調査項目・方法についても追記した。 <p>(資料－1 P15)</p>
松田座長、中田(喜)委員、西村委員、山本委員	<p>(事例紹介)</p> <ul style="list-style-type: none"> インパクトレスポンスフローや時系列的な整理等の事例については、検討の過程がわかるようにしてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> 事例を紹介する前にどのような点に着目して整理を行ったのか追記した。 <p>(資料－1 P16～20)</p>

委員名	指摘内容	対応内容
海域の健全性指標の検討について		
鈴木委員	(指標の整理方法) ・「再生産可能な海の仕組み」はどのような指標で表現できるのか、海域の健全性と指標をつなぐ必要がある。このような流れであれば指標の整理もしやすい。	・「再生産可能な生物資源を生み出す海の仕組みが健全であること」について、健全性と結びつくように検討を行った。(資料-1別紙)
松田座長、山本委員	(生態系の視点) ・生態系の構造(ストック)、機能(フロー)の、両方をバランスよく評価することがよい。 ・モデルに生物多様性を入れることは現在の技術ではできない。ヘルシープランではどのように生物多様性を扱っていくのか。	・物質(栄養塩類)の循環を指標として主に検討してきたが、生態系についても検討対象とした。(資料-1別紙) ・生物多様性については、インパクトレスポンスフローで、定性的ではあるが、健全化に向けて何が問題かということをおある程度整理できると考える。
松田座長、鈴木委員、中田(喜)委員、山本委員	(指標の視点) ・単純な負荷や取上げ(漁獲量・種類数等)、産卵場というような基本的な指標に入れてはどうか。 ・漁獲対象の魚類については、浮魚類と底魚類に分けて考える必要がある。また漁獲努力量の違いに留意する必要がある ・底生生物など泥の部分と底質を検討しないと、これまでの水対策の枠を出ない。泥の部分もしっかり扱ってほしい。	・漁獲量等、分かりやすい基本的な指標についても検討を行った。(資料-1別紙) ・底質の悪化が課題となっている、三河湾については、底生生物についてもモデルに組み込み検討を行っている。(資料-3)
松田座長、鈴木委員	(物質循環の観点の必要性) ・基準は濃度で定められていることが多い。濃度だけではなく、物質循環についても検討することは重要。 ・中長期ビジョンでは、「DO濃度」で基準化しようとしているが、物質循環の姿が健全かという視点で目標を考えることが必要。	・単純な濃度のみでなく、フローに係る移行速度や要素間の比率等についても検討を行った。(資料-1別紙)
鈴木委員、西村委員	(指標の解析) ・指標候補がどのように得られるものなのか(観測結果か、シミュレーションかなど)、整理する必要がある。 ・指標がモデルでどこまで再現が可能か示すことで、モデルで難しいところについては違う指標にするなど、議論が進んでいくことと考える。	・指標候補の入手のしやすさ、解析の容易性についても検討を行った。(資料-1別紙)

委員名	指摘内容	対応内容
地域検討委員会の調査・実証試験、モデルについての意見の概要		
西村委員	・播磨灘で海藻とプランクトンの競争であれば、栄養が上位につながっていくのかという重要なところはモデルでは比較的精度のよい結果が出せるのではないかと。	・一次生産者から上位への栄養塩の物質移動状況等についてモデルで検討出来るよう対応中。
松田座長	・三河湾でピコ・ナノプランクトンを取り上げ、AGP 試験を行っている理由を、はじめて読む人がわかるように工夫が必要。	・AGP 試験を行う理由について、地域検討委員会の資料を元に整理した。 (資料-1 P11)
松田座長、鈴木委員、山本委員	(播磨灘の物質循環の健全化) ・単純にノリ養殖だけをみていてよいのか。他の生物はどうなるのか。物質循環の健全化という枠組みのなかでの位置づけを話し合ってもらい必要があり、整理してほしい。 ・下水処理水が供給されないが故に海域の物質循環が不健全であるということは、海域の物質循環健全化においてはそぐわないと思う。	(地域検討委員会にて検討)
鈴木委員	(健全化に向けた施策の考え方) ・下水道の管理運転を実際の運用ベースでケースを考えていかないと、再生産可能な生物資源がどのように扱われているのか、わからなくなる。	(地域検討委員会にて検討)
西村委員	(地域の健全化の考え方) ・里海の物質循環はこういうものが健全だとか、あるいは水産の場として活用する場合はどうだとか、ケース分けがあつていいと思うが、これらを混在させると難しい議論になる。	(地域検討委員会にて検討)